# 金沢市河原市遺跡

## 一字一石経経塚の発掘

北陸自動車道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書

1974・2

石川県教育委員会

# 例　　言

Ⅰ　本書は昭和48年度に石川県教育委員会が実施した北陸自動車道路に係る発掘調査報告書であり、調査費用は日本道路公団が負担した。

Ⅱ　調　査　期　日　　昭和48年８月１日～昭和49年２月28日

Ⅲ　調　　査　　員　　調査団長　　高堀　勝喜（石川考古学研究会々長）

調 査 員　　荒木　繁行（石川考古学研究会副会長）

桜井　甚一（石川考古学研究会代表幹事代理）

谷内尾晋司（石川考古学研究会幹事）

赤木　克視

西野　秀和（石川考古学研究会々員）

浦　　茂樹（　　〃　　）

松田　正男（金沢市役所吏員）

吉本澄与治（　　〃　　）

南　　久和（　　〃　　）

事務局調査員　　橋本　澄夫（県教委文化財保護課文化財係長）

河崎与志雄（県教委文化財保護課文化財主事）

高橋　　裕（　　〃　　）

中島　俊一（　　〃　　）

篠田　政憲（　　〃　　）

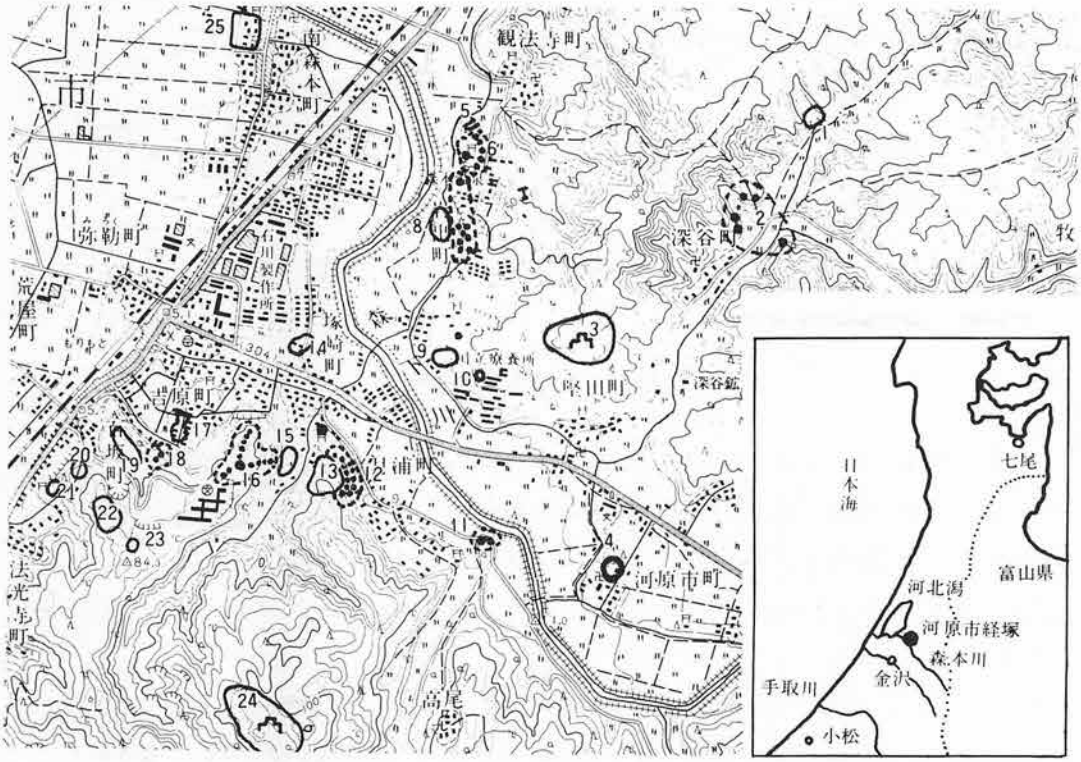
平田　天秋（　　〃　　）

Ⅳ　執 筆 ・ 編 集　　本書の写真撮影、図版の作成、原稿執筆と編集は橋本・平田があたった。

# 金沢市河原市遺跡

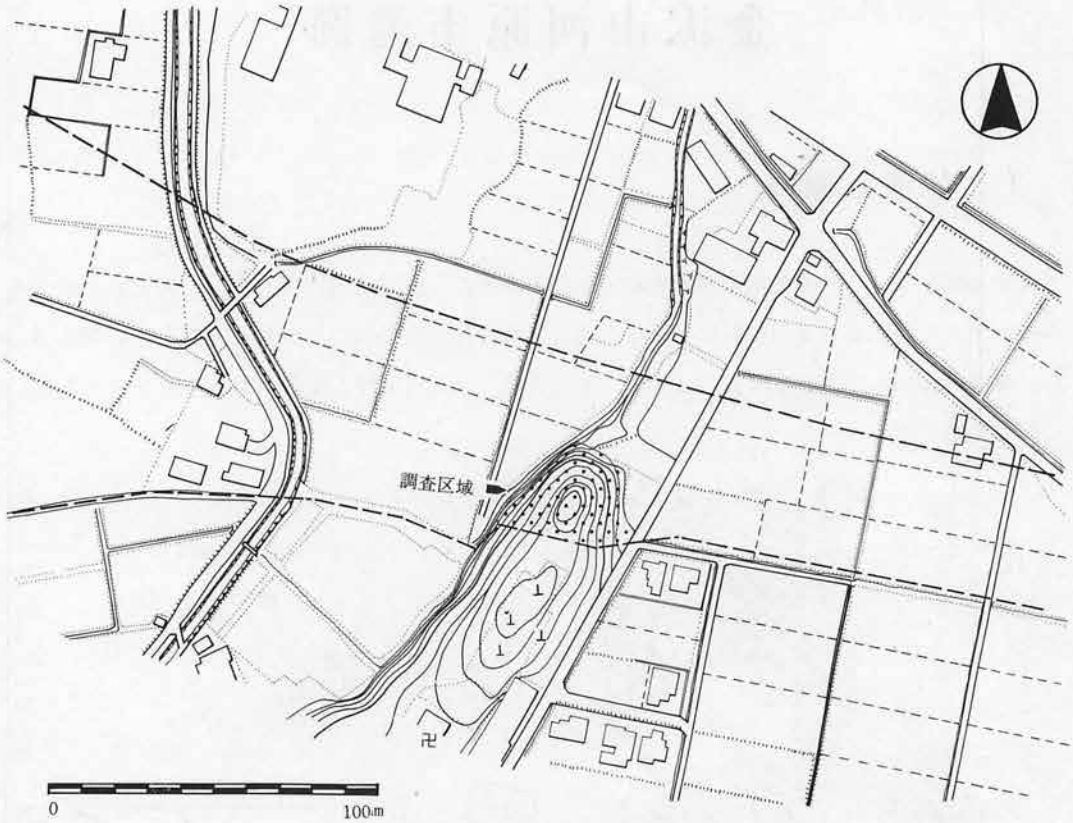
## Ⅰ　位置と環境

河原市経塚は、石川県金沢市河原市町地内に所在する。医王山系に源を発し、河北潟を経て日本海に流入している森本川の右岸で狭小な河谷平野のほぼ中央部に近い独立丘陵上に立地している。森本川に沿ってのびる国道 304号線（福光街道）は石川平野と富山県砺波平野を結ぶ古くからの主要道でもある。




第１図　遺跡付近の地形（粟崎1:25,000）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1　深谷遺跡 | 7　岩出１～８号横穴 | 13　塚崎遺跡 | 19　大門山遺跡 |
| 2　深谷１～５号横穴 | 8　岩出うつぼ遺跡（平安） | 14　塚崎たかき遺跡 | 20　百坂Ａ遺跡 |
| 3　堅田城跡 | 9　岩出うわの遺跡 | 15　塚崎大谷遺跡 | 21　百坂Ｂ遺跡 |
| 4　河原市経塚 | 10　岩出銭がめ塚古墳 | 16　吉原七ツ塚１～12号墳（吉原七ツ塚遺跡） | 22　百坂あらや山遺跡 |
| 5　観法寺瓦窯跡 | 11　月浦おやだま１・２号横穴 | 17　吉原親王塚古墳 | 23　松陵高校グランド遺跡 |
| 6　観法寺１～14号横穴 | 12　塚崎１～12号横穴 | 18　吉原法華堂１・２号墳 | 24　御屋敷城跡 |




第２図　遺跡付近の地形図

本遺跡は低小な独立丘陵の北寄りの先端にあり、それに接して現在の墓地が続き、さらにその背後には舟岡山円乗寺（日蓮宗）と河原市部落が形成されている。もともと本遺跡と墓地を含めて円乗寺の境内に属していたらしい。

なお、現水田面との比高は１号丘は9.50ｍ、２号丘は10.40ｍを測り、２号丘塚頂で海抜20.80ｍを測る。

本経塚周辺は、古代より加賀～越中を結ぶ要所にあたり数多くの遺跡が点在している。特に河谷平地より平野部に接する門戸ともいうべき地域には特筆すべき遺跡も少くない。森本川左岸の舌状台地端には塚崎集落遺跡（古墳前期・図１の13）があり、谷をへだてた西側丘陵には方形周溝墓を含む吉原町七ッ塚古墳群があり、さらに西隣して吉原町大門山土坑墓群（古墳前期・図１の19）が所在、近年来学界でも主要研究テーマの一つともなっている発生期古墳時代に関連する遺跡群が発見されている。これらの遺跡の大部分は昭和46年以降、北陸自動車道路建設に伴う分布調査で発見されたもので、調査によりその全容は次第に明かにされてきた。森本川右岸丘陵部においては観法寺（図１の６）、岩出(図１の７）横穴群など後期古墳時代に関する遺跡分布が確認されている。

## II　調査経過

昭和41年10月、北陸自動車道関係石川県文化財対策協議会が発足、昭和42年２月には、路線に沿っての第１次分布調査、同年９月には第２次分布調査が実施されている。その後に石川県北陸自動車道埋蔵文化財分布調査委員会（団長・秋田喜一）が正式に発足し、43年２～３月にかけて再度の分布調査を実施している。

しかしながら、地上（表面）観察に頼った当時の分布調査では、樹木の繁茂したままの状態であり、完全にその分布を把握することは難しく、樹木伐採後に発見されたものも少くなかった。七ッ塚古墳群・大門山遺跡と同様、本遺跡も路線決定後、昭和46年度塚崎遺跡第１次調査の際に調査団員により発見され、今回の本調査に至ったものである。

形状も小規模であり、立地の点からみても２基ともに後期古墳であろうというのが調査開始前のおおかたの意見であったが、樹木の伐採や地形測量などの作業を終ったあと十文字にトレンチを設定、発掘を開始した段階で１・２号（北→１号、南→２号)とも、盛土が非常に柔らかく不規則であり、当初に考えていた後期古墳ではなくもっと年代の降る塚状遺構であることが判明した。

## III　遺　　構

(1)　１号丘

径3.95ｍ、盛土高0.40ｍを測る（盛土高は、中央部での地山面よりの高さ)。中央部の黄褐色を呈する地山面においては、火葬人骨小片が径約30cmの範囲散布することを認めた。しかしその人骨のほとんどは粉状に風化しており、その部位などについては識別できなかった。１号丘からはこれ以外になんらの遺構・遺物を発見することはできなかった。

(2)　２号丘

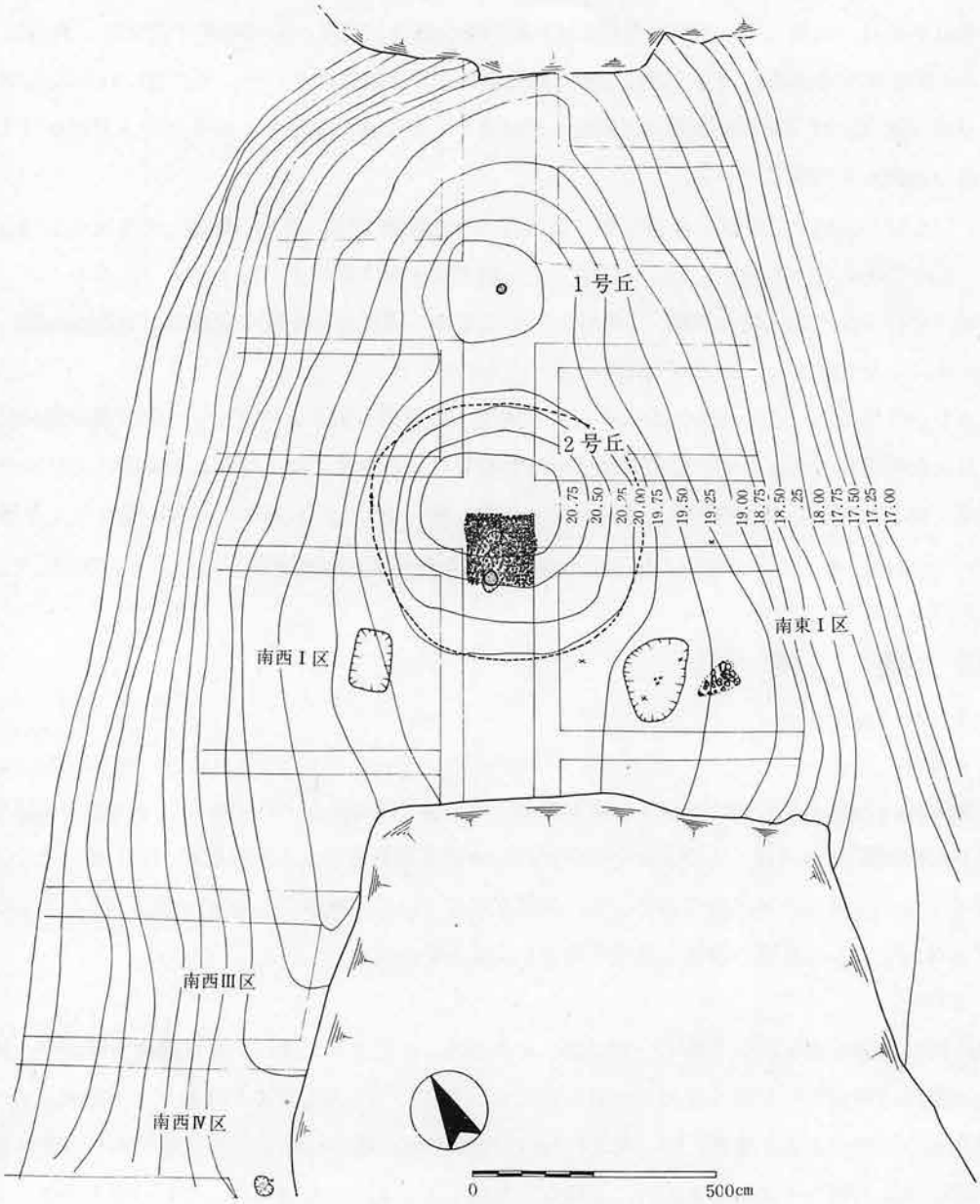
径5.30ｍ、盛土高0.70ｍを測る。中央部、やや北西にかたよって浅い土坑状遺構を伴ない、径28cmの範囲に粉状化した骨片と黒灰が認められた。さらにこの人骨片をとり除くと多量の写経石の検出をみたのである。東西1.5ｍ、南北1.3ｍのほぼ方形に敷きつめられた状態であり、深さ32cm程度に地山を掘りくぼめた土坑内に写経石を充鎮していることが判った。なお、盛土中より永楽通宝１、寛永通宝２、不明３点の銅銭が出土している。

(3)　その他の遺構

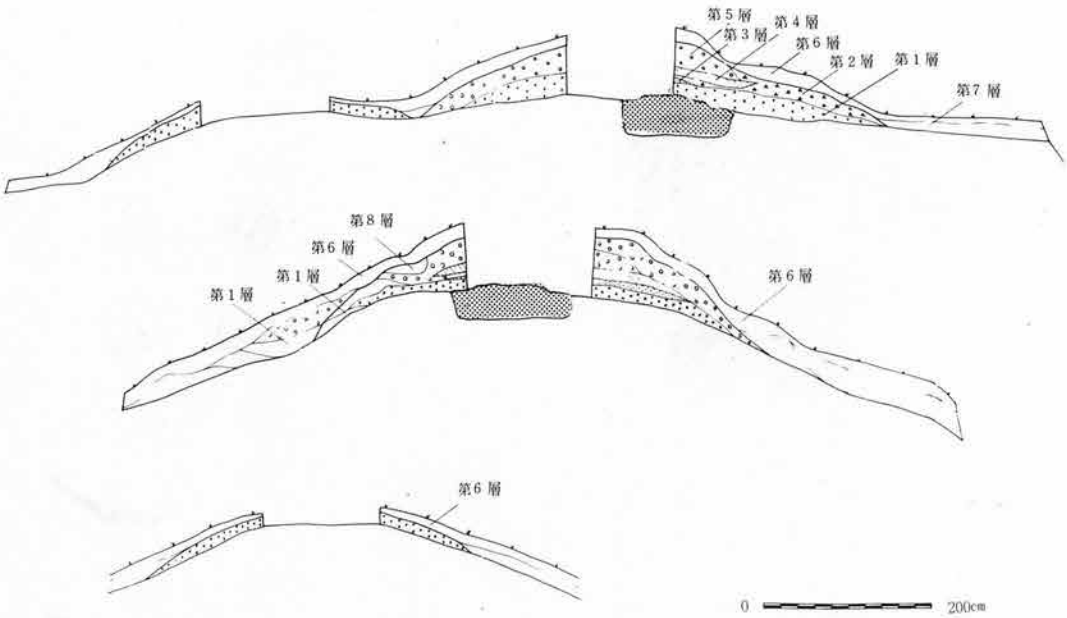
２号丘の南北においても、図（第３図）のように調査区画を設定した。

○南東Ｉ区　土坑状遺構

不整形なプランを有し、土坑内には燈明皿１個体分（図５の４）が検出された。


1号丘
2号丘
20.75
20.50
20.25
20.00
19.75
19.50
19.25
19.00
18.75
18.50
.25
18.00
17.75
17.50
17.25
17.00
南東Ⅰ区
南西Ⅰ区
南西Ⅲ区
南西Ⅳ区
0
500cm

第3図　地形測量図




第1層　黄褐土（地山のブロック含）
第2層　黄褐砂土
第3層　黄褐土（地山のブロック多含）
第4層　黄褐砂土（地山のブロック多含）
第5層　黄褐砂土（基本的には第4層と同じ）
第6層　表　土
第7層　暗黄褐土
第8層　撹　乱
第9層　黒色土

第4　　断　面　図

○南東Ⅰ区　配石遺構

上記の土坑東側にほぼ接して検出した。人頭大の河原石数個を配置するもので、木炭、灰とともに燈明皿1個体分が伴出している。なお、配石も火熱をうけていた。

○南西Ⅳ区　土坑状遺構

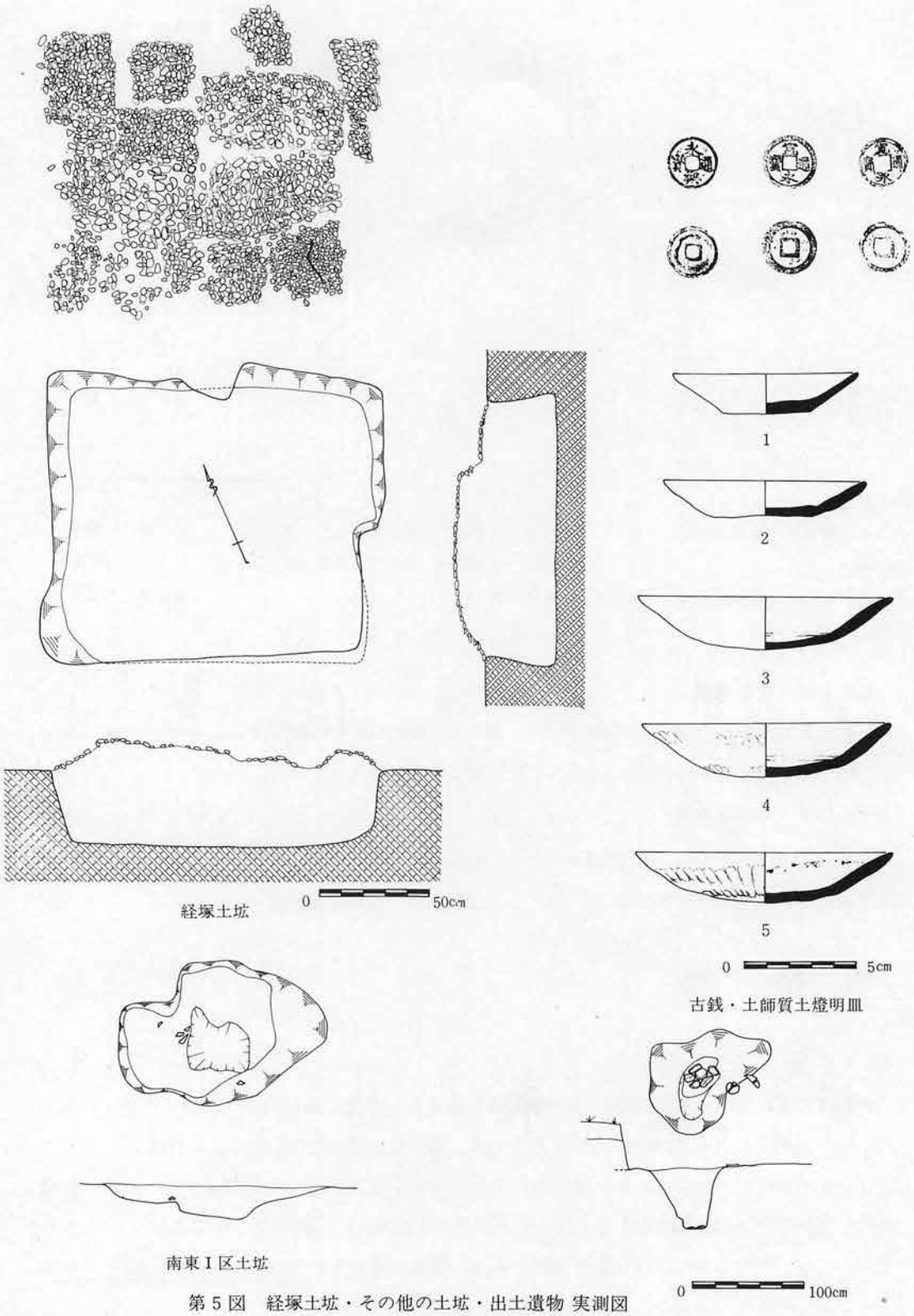
不整形なプランをもち、深さ55cmを測る。床面には人頭大の遍平な河原石を配し、土坑上面には2個体分の燈明皿が並べられていた。この燈明皿は二次的な加熱をうけている。

## Ⅳ　遺　　物

(1)　写経石

経石は非常に厖大な量で概算50,000個前後を数える。経塚の遺存状態は極めて良好で損傷していないから紛失したものはないものと考えられ、全字数が遺存したものとみられる。

2～5cm程度の比較的柔らかい礫を用いて、例外なく1石1字づつを墨書しているが、裏面で失敗して同字を表面に書きなおしたとみられる例が1点あった。礫の全てに写字しているものと思われるが、かなりのものは判読不可能である。書体は楷書であるが少くとも5名以上の人々によって書写されているらしく、書体に変化がみられた。




第５図　経塚土坑・その他の土坑・出土遺物 実測図

第6図　経石実測図

0　10cm

(2) 土　器

すべて土師質の皿である。図5の1、2は、小形品でほぼ正円形をなし、つくりもしっかりとしている（径8㎝)。口縁部および内面には、横なでによる整形がみられ、外面底部近くでは指頭による押えが認められる。ともに内面には炭素の付着が見られる。

図5の3、4、5は径11㎝程度。ともに薄手で口縁部および内面には横なでによる整形が施されている。外面底部近くと口縁よりやや下った部位との二ヵ所には小形品にみられた押えの手法が認められる。底部は丸底に近く、図5の3、4では底部と口縁部の境でかるい段をなす。図5の5には内面に炭素の付着が認められる。

## V　若干の所見

経塚造営の風は平安後期におこった末法思想の流布とともに盛行している。すなわち仏教の根本である〝正法なる経典〟を土中に埋納し、56億7千年後の弥勒出生の暁に備えようということより行なわれたものと一般に解されている。日本では西暦 1052年（永正七）に末法の世に入ると考えられていた。

初期の経塚としては奈良県金峯山経塚などが著名であり、経筒の銘文によって寛弘四年（1007）に藤原道長が埋納したことが知られている。県内でも、吉野谷村笈岳経塚、辰口町長滝経塚などで貴重な経塚が発見されている。笈岳経塚出土の経筒銘永正15年（1518）は回国聖による埋経の早い例である。隣県、富山県中新川郡上市町京ヶ峯経塚（日石寺経塚）は経筒銘により仁安二年（1167）と埋経の年次が明らかであり、本県においても平安時代に属する経塚の発見もあり得ると想われる。時期が下るにつれて、本来の目的が忘れられ造営者自身の極楽往生と一族の先祖を供養するために経典を書写し埋経することが多くなっている。一字一石経なぞは経文の不滅化とともに数の多少によって信仰の深浅を表現しようとした形式化が伺えるもので、辻善之助氏などは信仰堕落の象徴とも極言している「日本仏教史」。

本遺跡の場合においても50,000個前後の数をかぞえ、一石に一字の経文を書写するという行為そのものによって、巧徳と供養をつみたいという通例に従っているようである。なお、少量の人骨片が共存していることからみても、追善供養的な色彩をも強く感ぜさせる。県内においては別表にみるようにかなりの数の経塚があるが、築造意図の明確なものは少なく、一字一石経による経塚の調査例も少ない。

地上に石塔その他標示となるようなものはなく、塚内部の調査によっても、また遺物の面からみても経塚造営にかかる意図を具体的に示すような資料は発見できなかった。なお、造営者などについては全く明らかにできなかった。

造営年代についても、土師質燈明皿、古銭（永楽通宝、寛永連宝）と盛土中よりの伴出遺物によるより手段がないが、一般に一字一石経経塚が経塚終末の姿であるとされており、藩政時代のある時期（おそらく中頃まで）に造営されたものと想定している。

経文についても、本来一行一七文字のものを例外なく１石に１字すなわち経文を最小単位まで解体した形となっており、原典の復元は非常に困難を極めるが、経石の総数、写字の種類やその頻度からみて法華経全巻（八巻）を書写埋経したものであろう。経塚研究は調査事例も少なくなく遅れている分野であり、それらの実態を解明するまでにはなお数多くの蓄積を要するのであり今後の研究課題としておきたい。

なお、調査、報告書作製にあたって、高堀勝喜（調査団長）、桜井甚一（石川考古学研究会代表幹事代理）、荒木繁行（石川考古学研究会副会長）、谷内尾晋司（石川考古学研究会幹事）、赤木克視氏の各氏には多大な助言、御指導を受けました。また、森本町月浦、高尾両地区の有志の方々ならびに円乗寺住職の皆さまには厚くお礼申しあげます。

## 参考文献

「日本の考古学」歴史時代下　経塚　　三宅　敏之
「考古学講座」特論〈上〉　経塚　　奥村　秀雄
「仏教考古学講座」墳墓・経塚編　経塚　　矢島恭介・蔵田　蔵
「日本仏教史」上世編　信仰の形式化　　辻　善之助
「堀端経塚発掘調査報告書」　今市市教育委員会　昭和42.3
「槇か根経塚、旧長岡寺跡」　恵那市教育委員会　昭和46.3
「富山県史」考古編　　富山県　　昭和47.3

# 石川県経塚遺跡地名表

## (1) 一字一石経経塚

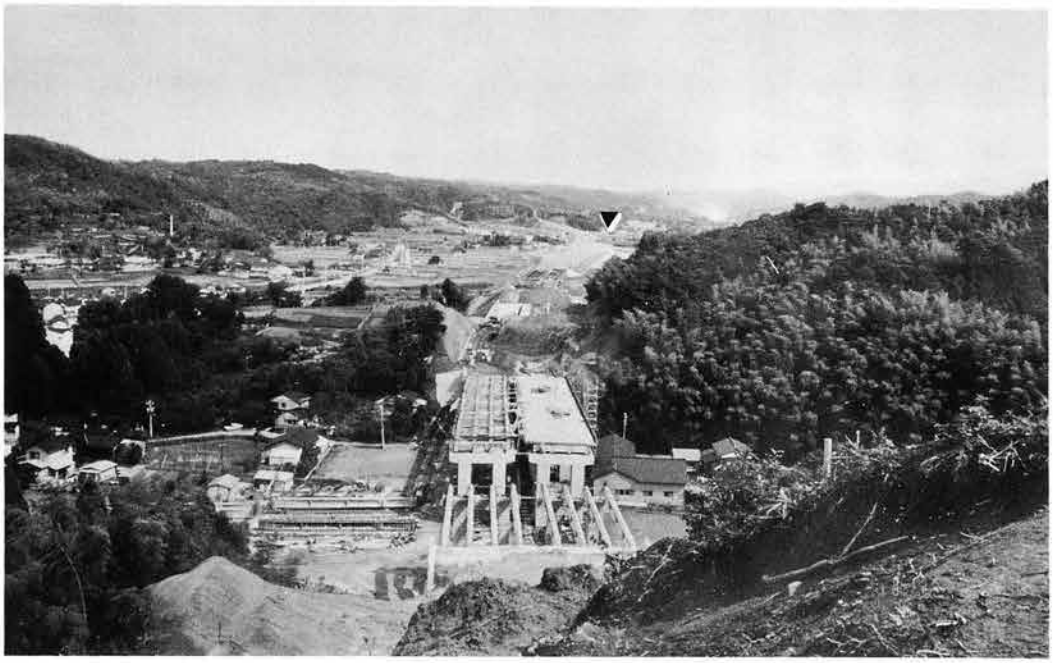
| No. | 名　　称 | 所　在　地 | 出土品その他 | 時　代 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 長　坂　経　塚 | 金沢市長坂町 | 経石（一字一石）200個 | 室町 | 石川考古学研究会誌12 |
| 2 | 敷　地　経　塚 | 加賀市大聖寺敷地町 | 凝灰岩８枚組合せ<br>周囲2.24m深0.6m | 江戸末期 | 石川考古学研究会誌４ |
| 3 | 寺　尾　山　経　塚 | 加賀市曽宇町寺尾 | | | 〃 |
| 4 | 篠原神社境内経塚 | 加賀市篠原町 | 法華経の一字一石２基 | | 柴山潟 |
| 5 | 佐　美　経　塚 | 小松市佐美町 | 径３ｍ、高0.4ｍ<br>経石（墨、朱書） | | 小松市史(4) |
| 6 | 鳥　　経　　塚 | 小松市島町 | 径３ｍ、高１ｍ<br>塚は土砂と小石で築造 | | 能美郡誌 |
| 7 | 佐　味　経　塚 | 七尾市佐味町 | ２ｍ×２ｍの範囲に経石散布（塚消滅） | | |
| 8 | 中　狭　遺　跡 | 七尾市中狭町 | 経石（一字一石）珠洲焼片 | | |
| 9 | 岡　経　塚　(I) | 七尾市岡町 | 経石（一字一石）珠洲焼片 | | |
| 10 | 岡　経　塚　(II) | 七尾市岡町 | | | |
| 11 | 言　若　経　塚 | 鳳至郡柳田村合鹿 | 径４ｍ、高１ｍ<br>経石（一字一石）銅銭 | | 能登名跡志 |
| 12 | 種　ヵ　島　経　塚 | 鹿島郡中島町瀬嵐 | 経石（一字一石） | | 橋本澄夫調査(Ｓ37.5) |
| 13 | 幸　明　経　塚 | 松任市幸明町187 | 経石（一字一石）数千枚<br>五輪塔 | | 中里村誌 |

## (2) その他の経塚

| No. | 名　　称 | 所　在　地 | 出土品その他 | 時　代 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小坂１号墳<br>墳　頂　経　塚 | 金沢市小坂町 | 経筒２、経軸２、鉄鎌１<br>青白磁合子１ | 鎌　倉 | 石川考古学研究会誌13号 |
| 2 | 笈　岳　経　塚 | 石川郡吉野谷村 | 経筒２口、小仏像５体、<br>鏡２面、鉄製武器約60口 | 室町後期 | 高橋健自<br>考古界５－６ |
| 3 | 妙　法　山　経　塚 | 〃 | | | |

| No. | 名　　称 | 所　在　地 | 出土品その他 | 時　代 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 長　滝　経　塚 | 辰口町長滝 | 草花雙雀鏡他３面、四耳壺 | 鎌　　倉 | 能美郡志 |
| 5 | 仏　生　寺　塚 | 小松市遊泉寺町 | 和鏡 | | 国府村史<br>小松市史(1)(4) |
| 6 | 林八幡神社経塚 | 小林市林町 | | 鎌倉後期 | 能美郡史<br>日末町史 |
| 7 | 池　城　経　塚 | 小松市池場町 | 径３ｍ、高1.2ｍ、甕 | 室　　町 | 西尾村史 |
| 8 | 日　末　経　塚 | 小松市日末町釜山 | 白銅鏡 | | |
| 9 | 八　幡　経　塚 | 七尾市八幡町 | 径６ｍ、高1.5ｍ、<br>陶製経筒 | | |
| 10 | 約　　塚 | 珠洲市正院町岡田 | | | |
| 11 | 高屋小学校経塚 | 珠洲市高屋町 | 径10ｍ | 室　町？ | |
| 12 | 石　坂　経　塚 | 珠洲市上戸町南方 | | | |
| 13 | 鈴　内　経　塚 | 珠洲市若山町鈴内 | 高３ｍ<br>古銭出土 | | 珠洲郡誌 |
| 14 | 宇加塚の経塚 | 鳳至郡能都町宇加塚 | | | |
| 15 | 光明寺経塚 | 鳳至郡柳田村北河内 | 径５ｍ<br>経筒破片（消滅） | | |
| 16 | 笹　川　経　塚 | 鳳至郡柳田村笹川 | 径５ｍ<br>経筒出土伝（消滅） | | |
| 17 | 上　町　経　塚 | 鳳至郡柳田村上町 | 径10ｍ | | |
| 18 | 道　下　経　塚 | 鳳至郡門前町道下 | 丘陵端 | | |
| 19 | 久　川　経　塚 | 鳳至郡門前町久川 | 径４ｍ、高２ｍ | | |
| 20 | 吉　浦　経　塚 | 鳳至郡門前町吉浦 | 10ｍ×５ｍ、高２ｍ | | |
| 21 | 二又川経塚 | 鳳至郡門前町二又川 | 珠洲焼片 | | |
| 22 | 須　曽　経　塚 | 鹿島郡能登町須曽 | | 室　　町 | |
| 23 | 祖母ヶ浦石塚遺跡 | 鹿島郡能登島町祖母ヶ浦 | 高４ｍ<br>珠洲焼、宋銭、銅鏡 | 室　　町 | |

| No. | 名　　称 | 所　在　地 | 出土品その他 | 時　代 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 箕打1～8号経塚 | 河北郡高松町箕打 | 小丘陵 | | |
| 25 | 小　竹　経　塚 | 鹿島郡鹿島町小竹 | 消滅 | | 鹿島郡史、鹿島町史 |
| 26 | 経　　塚 | 鹿島郡鹿島町 | | 鎌倉中期？ | 鹿島町史 |
| 27 | 福　野　経　塚 | 羽咋郡志賀町福野 | 丘陵端<br>珠洲焼片、古銭 | | |
| 28 | 福　浦　港　経　塚 | 羽咋郡富来町福浦港 | 径12m、高3m | | |
| 29 | 余　地　経　塚 | 河北郡宇ノ気町余地 | 珠洲焼片？ | | 石川県史5 |
| 30 | 宮の奥1号経塚 | 小松市遊泉寺町 | 径6m、高0.48m | | 石川考古学研究会誌6<br>小松市史(4) |
| 31 | 宮の奥2号経塚 | 小松市遊泉寺町 | 径7m、高0.67m | | 〃 |
| 32 | 宮の奥3号経塚 | 〃 | 径7.5m、高0.68m | | |
| 33 | 沖　波　十　三　塚 | 〃 | 台地端 | | 諸橋村史、穴水町の文化財 |



遠景（七ッ塚古墳より塚崎遺跡を経て富山方面を望む）

2号近景（南より、調査前）

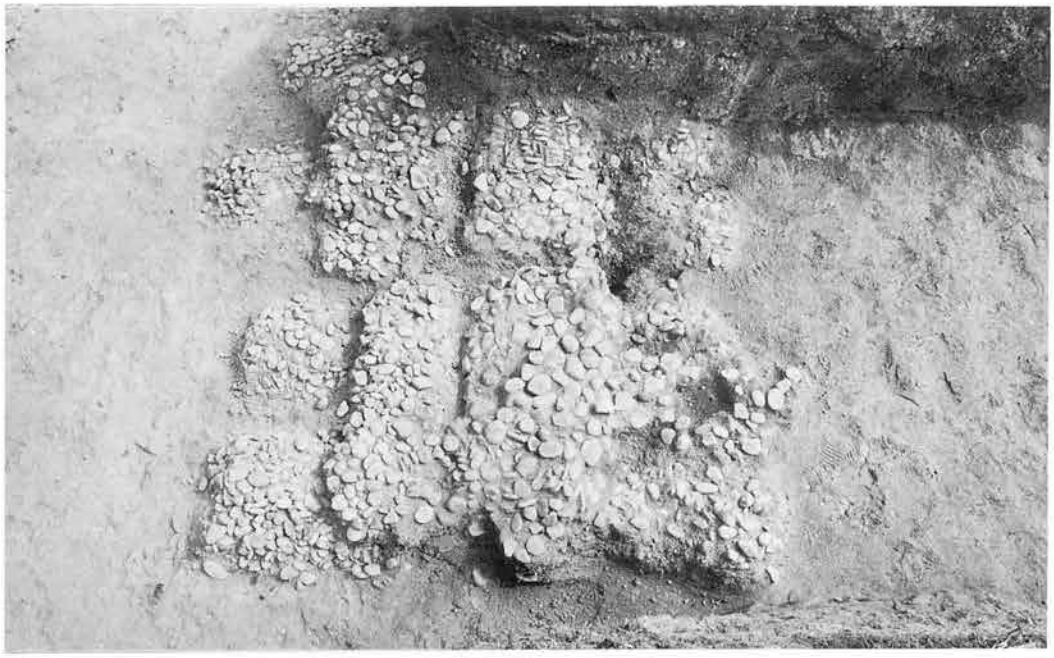
遠景（西より、調査前）

近景（西より、調査前）

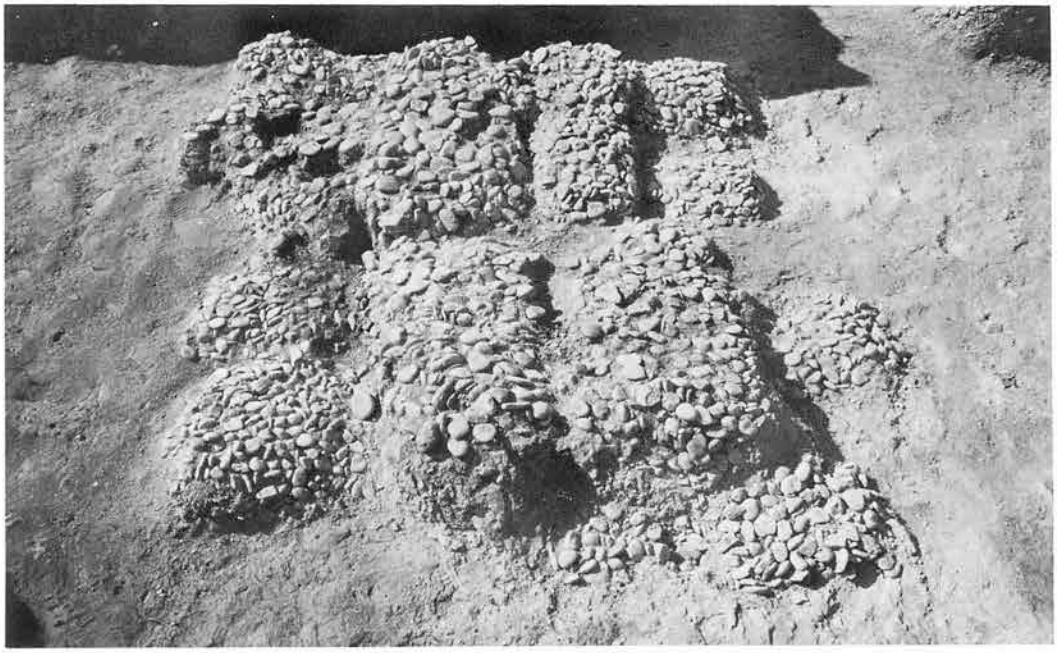
遠景（東より、調査前）

近景（東より、調査前）

図版Ⅳ

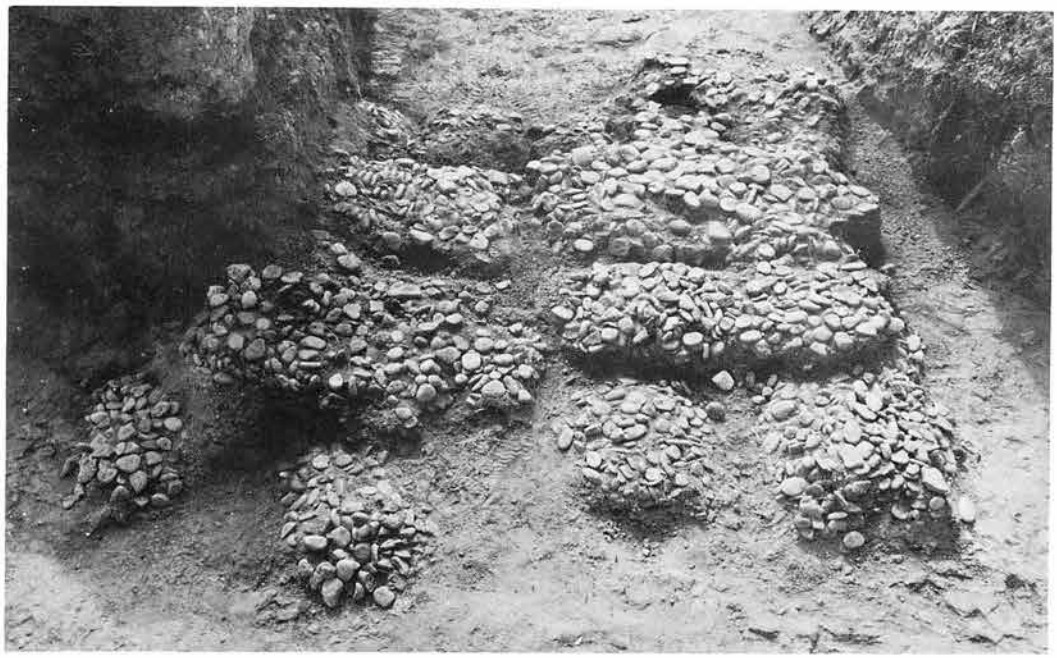


経石出土状態（西上より）



経石出土状態（東上より）

経石出土状態（南より）



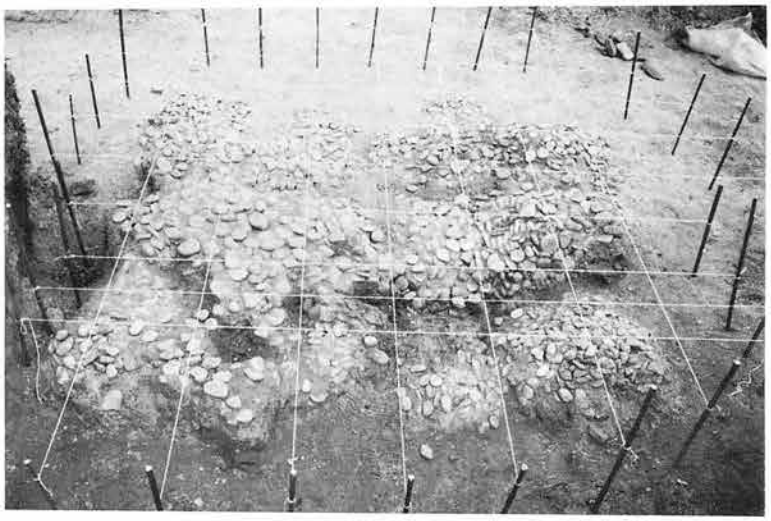
経石出土状態（北より）

経石出土状態（北より、土坑との関係）

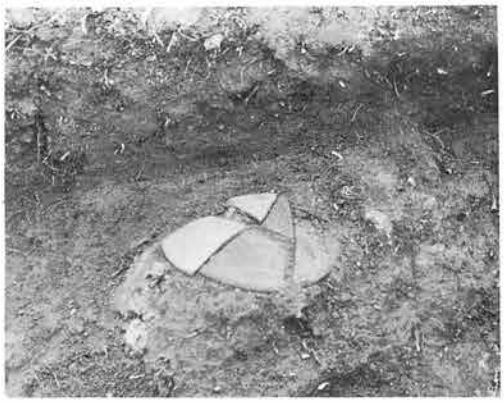
経石出土状態（西より、土坑との関係）

経石出土状態

経石取り上げ後の埋石土坑



経石平面実測



2号裾燈明皿出土状態

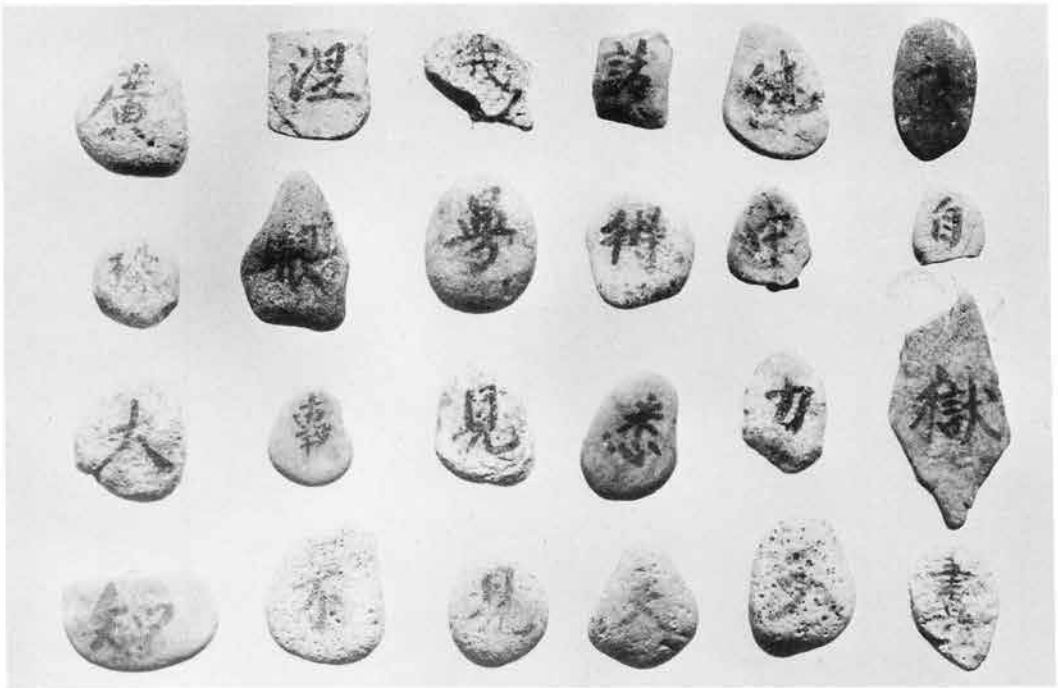
配石遺構

2号人骨及び灰

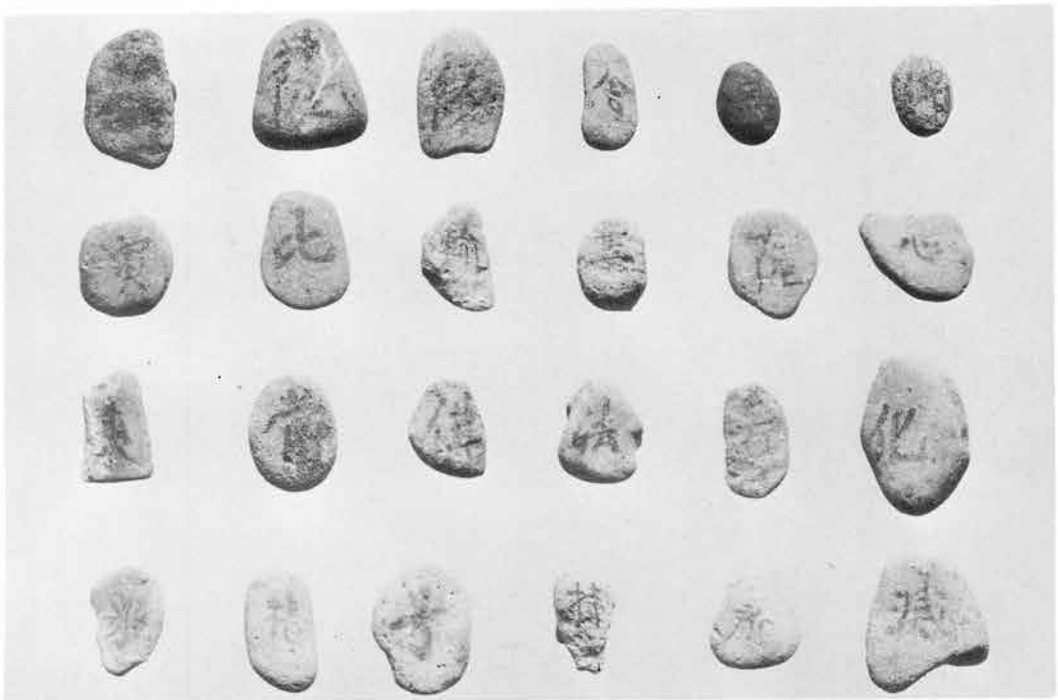
南西Ⅳ区土坑

経石（應、女、獨、音、通、薩、報、亥、聞、當、一、度、德、三、法、経、時、此、丘、丘、諸、善、違、放）

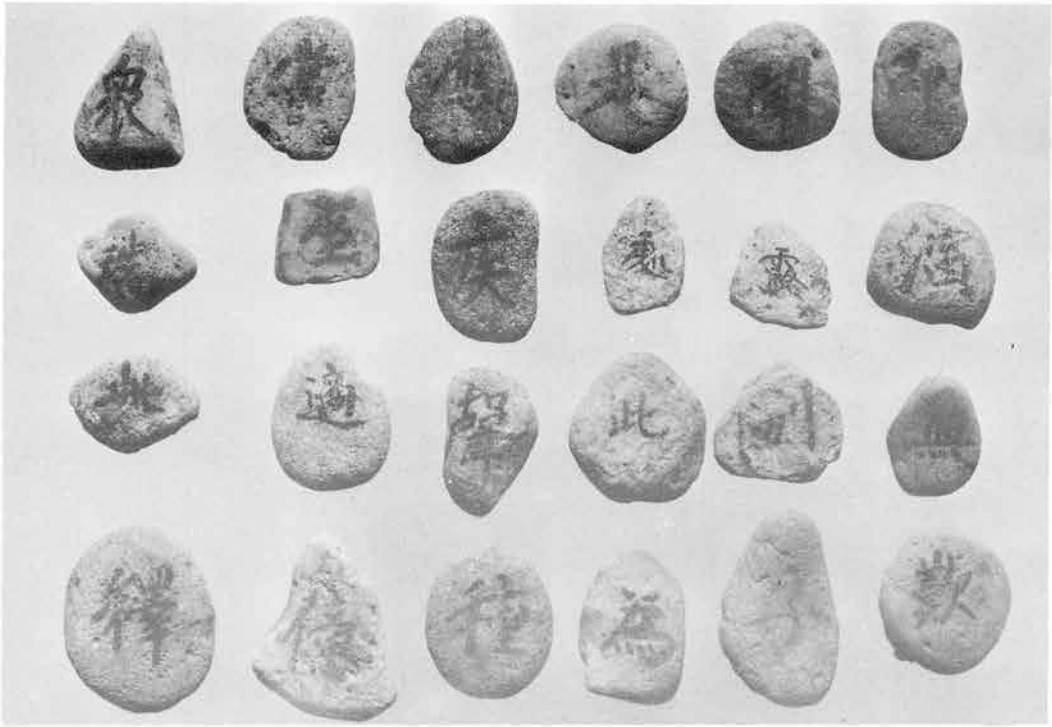
経石（執、時、故、退、其、作、眷、喜、鈍、是、見、其、重、自、出、三、虚、亦、汝、令、王、行、而、滅）



経石（廣、涅、我、諸、継、復、珠、眼、昇、得、中、自、大、筆、見、悉、力、獄、智、不、見、天、天、書）



経石（爲、薩、縁、舎、無、佛、演、此、輪、菩、薩、心、来、當、佛、法、百、化、衆、精、号、持、所、滅）

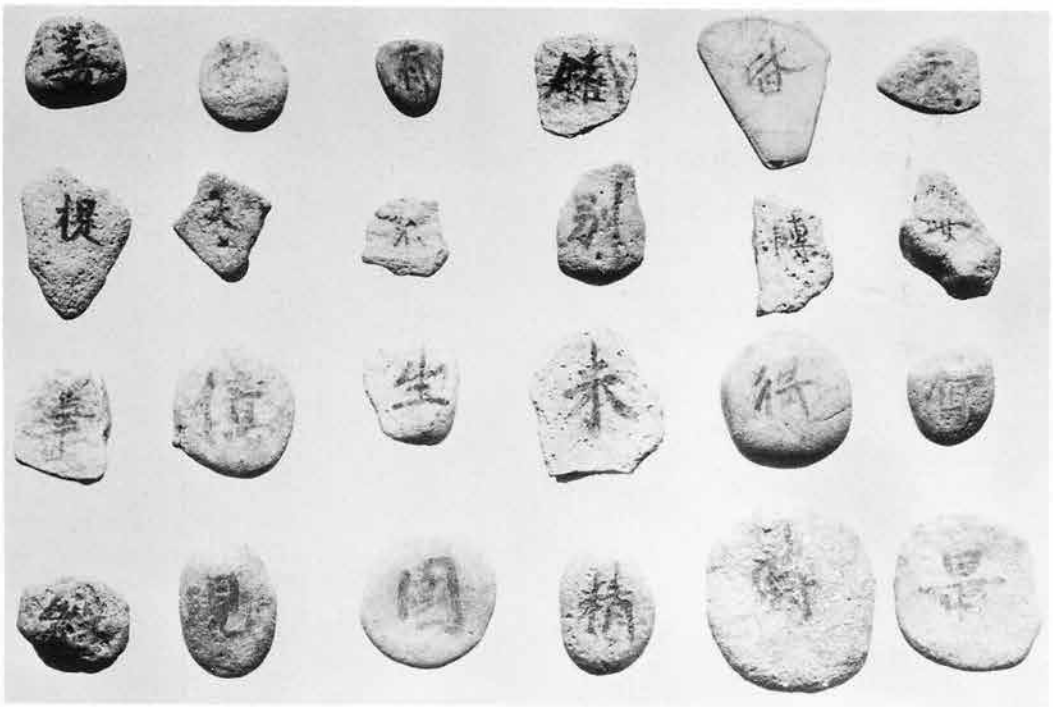


経石（衆、當、應、是、聞、即、瑞、坐、疾、處、露、演、此、適、馨、此、別、無、釋、億、種、為、子、歎）

経石（現、可、者、一、是、人、言、衆、吉、處、無、養、示、佛、佛、自、不、穏、是、国）

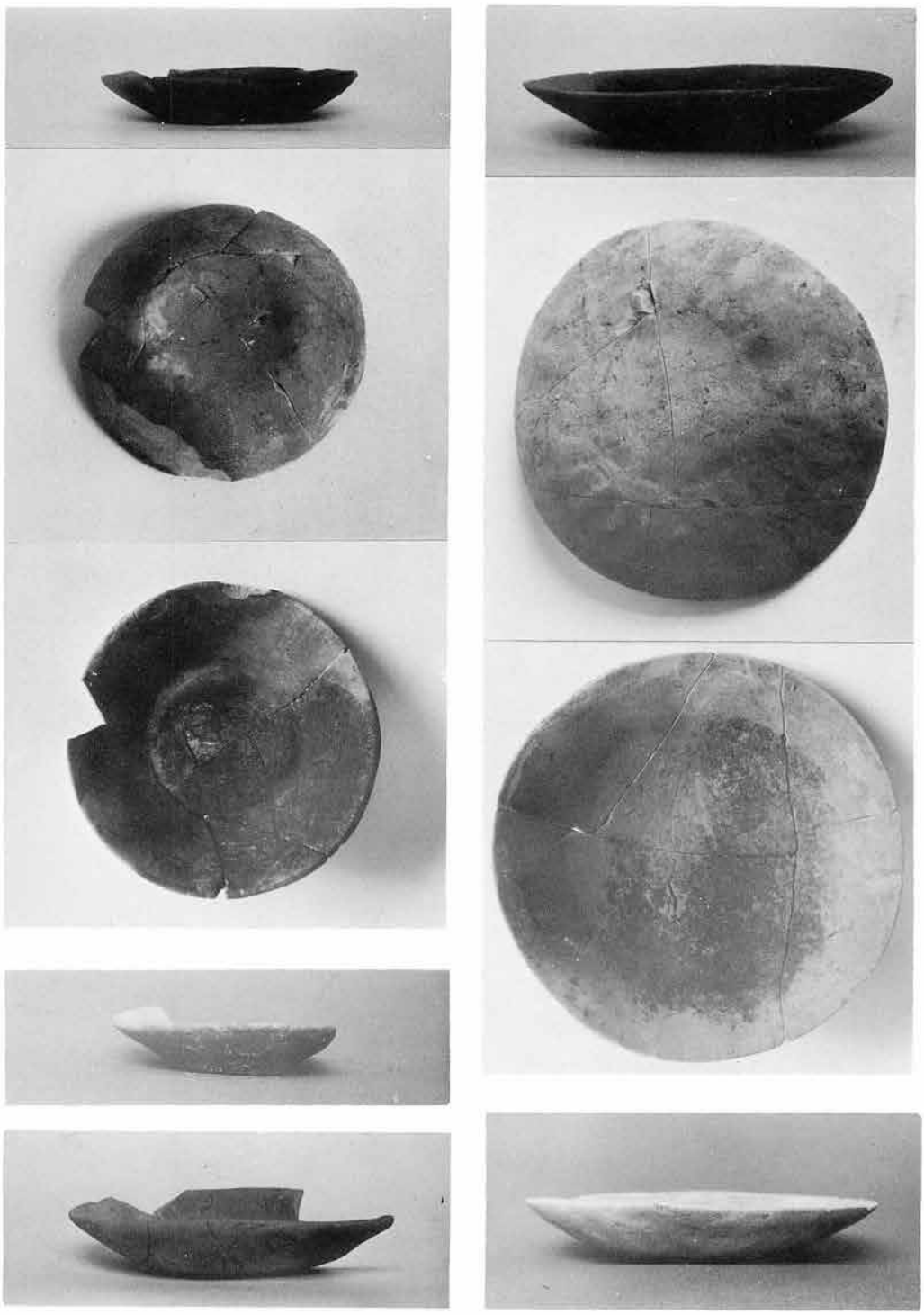
経石（徧、多、等、丘、時、羅、難、德、諸、誦、時、諸、三、躍、能、醫、聖、恭、禪、又、佛、塞、慧、説）

経石（此、佛、體、記、地、而、有、国、利、米、錯、耶、我、説、往、藥、難、子、受、處、盡、汝）



経石（善、於、有、鐵、皆、天、提、大、不、別、轉、女、華、億、生、来、得、寫、経、現、国、精、時、量）

経石（念、心、衆、子、法、故、此、信、見、書、為、上、傍、是、常、諸、女、阿、一、其、念、應、若、事）



土師質燈明皿

金沢市河原市遺跡
一字一石経経塚の発掘
昭和49年2月20日　印　刷
昭和49年2月28日　発　行
編　　集　　石川県教育委員会文化財保護課
発　　行　　石川県教育委員会
印 刷 所　　中川大正印刷㈱